

強者の戦略

【解答】

設問A

- (1) 東部は温暖湿潤な平野地域で、西部は乾燥高原地域であるため。(29字)
- (2) 山麓の麓やダム建設などにより農業・生活用水の取得が便利であった点。温暖な気候のもと、先端技術産業の集積が進んだ点。(57字)
- (3) 小麦生産を中心とする大規模農業地域にタウンシップ制由来の散村が形成されていたが、大陸横断鉄道の開通と共に河川との合流地点である交通の要地に多数の集落が形成されるようになった。(87字)

設問B

- (1) 重工業の衰退と共に先端産業の集積するサンベルト地域へ人口が流出した点、および南部地域にヒスパニックが多数流入した点。(58字)
- (2) 中心都市に集中した状態から郊外へ集中する状態へ変化した。(28字)
- (3) 都心地域の老朽化住宅地区やスラムなどが再開発されることで、利便性が向上して地価も高騰し、以前住んでいた住民が住めなくなり、より高学歴で高所得者層が居住するようになってきている。(88字)

設問C

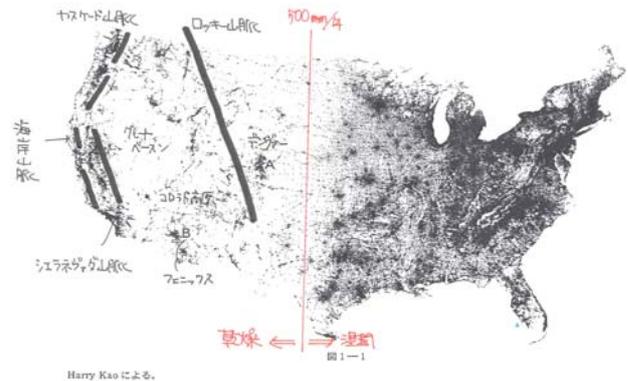
- (1) (a)ーエ (b)ーウ (c)ーイ (d)ーカ (e)ーオ (f)ーア
- (2) 旧ソ連の組織的移住政策でロシア人移民が多くなっているため。(29字)

【解説】

設問A

- (1) 基本的な内容だと思います。アメリカの東西の降水量分布を考えると、西経 100 度の年間降水量 500mm のラインの西部が乾燥地域、東部が湿潤地域になっています。当然、降水量が多い方が農業用水、生活用水などが得やすいので人口が集中する傾向があります。次に地形環境を考えましょう。西部にはロッキー山脈を中心に、カスケード山脈、シエラネヴァダ山脈、海岸山脈などの山脈が多く、グレ

ートベースンやコロラド高原などの高原も多く存在しています。高度が高いとそれだけ気温が低くなったり、水の利用が難しくなったりするので、人口の集中度は下がってくると思われます。つまり、**西部は高原で乾燥、東部は平原で湿潤**、この内容を書くことができれば問題ないでしょう。



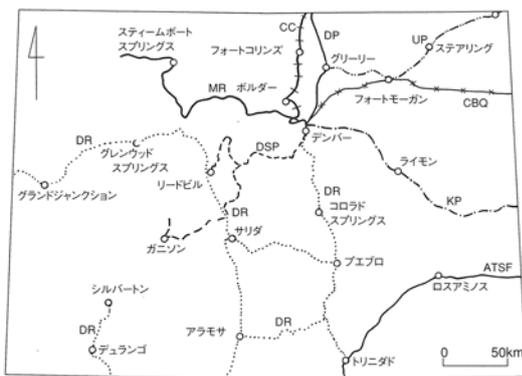
- (2) この問題はなかなか書きづらい問題だと思います。A、Bのことを1行ずつで書き分けることが求められているのか、はたまた共通の内容を2行で述べるのが求められているのかが判然としないからです。ちなみにAは**デンヴァー**で、Bは**フェニックス**です。

まずはデンヴァーの発達を概観してみましよう。**デンヴァーの発達は鉄道の発達が原因**でもありません。デンヴァーに鉄道が初めて達したのは1870年です。ユニオン・パシフィック鉄道は大陸横断鉄道をロッキー山脈の険しさをさけ、ワイオミング州に通しました。路線から外れたデンヴァーの資本家たちはデンヴァー・パシフィック鉄道を建設し、3年目にグローリーを経由してシャイアンで大陸横断鉄道に連結させました。1860年代、ゴールデンにコロラド・セントラルが設置され、クリアクリーク、ジョージタウンの鉱山町へ狭軌鉄道を敷き、さらにボルダーやフォート・コリンズから山麓沿いにシャイアンに至る鉄路が完成しました。1884年には当時絶頂期にあったブレッケンリッジやリードビルの鉱山町への路線が完成しました。1870年にカンザスシティー-デンヴァー間にカンザス・パシフィック鉄道が完成し、**東部の乾燥地帯での農業開発を活発化**させま

強者の戦略

した。また、西への鉄路延伸により、グランドジャンクションの**果樹地帯**や**炭田開発**が進みました。南部のアラモサにも路線が引かれ、サンルイス盆地の農業が発展しました。このように、鉄道の開通は路線の産業発展を促進し、地域間の統合を強めました。このため、州人口は1870～1880年の間に5倍に増大し41.3万人に達しました。

1880年代には大規模な金や銀の鉱脈が発見されて、クリップル・クリーク、ジョージタウン、リードビル、アスペンなどの鉱山町が繁栄しました。デンヴァーはこれらと東部の市場とを結ぶ結節基地となり、精錬所や製造工場が増加しました。**20世紀初頭には鉱山用機械の生産で世界一となり、食品加工業集積地ともなりました。**



DR:デンバー・リオグランデ DP:デンバー・パシフィック DSP:デンバー・サウスパーク・パシフィック
CC:コロラド・セントラル KP:カンザス・パシフィック MR:マホットロード ATSF:アチソン・ベカ・サンタフェ

図99 コロラドにおける鉄道の敷設状況
Noel et al, 1994, *Historical Atlas of Colorado*, University of Oklahoma Press より編集

『図説 ニューゼaland・アメリカ比較地誌』より。

1960～70年代、著しい経済成長は多くの雇用を生み、気候やロッキーの景観のよさから多くの人口を吸引しました。80年代はオイルショックの影響で石油や石炭など地下資源が注目され、ダウントウンに高層ビルが林立するようになりました。

90年代は全米第1位の経済成長を示したほどの大躍進を示しました。**コンピュータや通信事業を中心にハイテク産業の成長が促進された**からです。州は土地の提供や税制優遇などの処置により誘致を進め、北はフォート・コリンズ、南はコロラド・スプリングスに至る南北約200kmの**ハイテク産業の一大**

集積地へと発展しました。今では**シリコンマウンテン**と呼ばれるようになっています。**生活環境の良さが高学歴者に人気を集めた**ことも大きいです。ハイテク関連企業に、州雇用者の約1割、7.6万人が従事し、輸出の62%をその関連製品で占めます。デンヴァーには、デンヴァー・テック、インバーネスなどビジネス・研究パークが続々開発されています。

上記から考えると、社会的要因は鉄道建設、ハイテク地域への変貌が挙げられ、自然的要因は温暖な気候、農業の発達などが挙げられるでしょう。ちなみに、**農業用水はロッキー山脈の雪解け水を利用**することができています。

Bのフェニックスはアリゾナ州の中に位置しています。アリゾナ州は人口規模が小さかったことから、乾燥地でありながら長らく地下水や先住民が建設した用水路を用いて生活用水や灌漑用水を確保してきました。20世紀になり、連邦政府開拓局により**ダム建設**や**導水路建設**が計画され始めましたが、1970年代には環境保全の観点からその多くは中止されました。1968年に承認されたCentral Arizona Projectにより、コロラド川のハヴァス湖からフェニックスを経てツーソンまでの導水路が完成したのは1993年です。こうした**インフラ整備の完了した時期は、フェニックス都市圏の近年の人口増加や経済発展の開始期と同じくしています。**

フェニックスは、**ニューディール政策のダム開発で得た豊富な電力供給を背景とした軍事産業に関連した航空機産業や電気機械工業を発展**させてきました。1990年代には他の先端産業集積地同様に、フェニックス南郊のチャンドラーを中心に**シリコンデザート**と称される**エレクトロニクス産業とICT産業の集積地が形成され、同都市圏に急速な人口増加をもたらしました。**現在でも、こうした産業部門の重要性に変化はなく、2007年におけるフェニックス都市圏の先端産業の従業者数は約27.8万人で、製造業従業者の47%を占めています。またソフトウェア産業などのITサービス業の従業者数は43.3

強者の戦略

万人で、2001年～2007年間のその成長率も約75%増加しています。こうした産業部門の成長が砂漠都市フェニックスの経済を支えていると言えらるる思ひます。

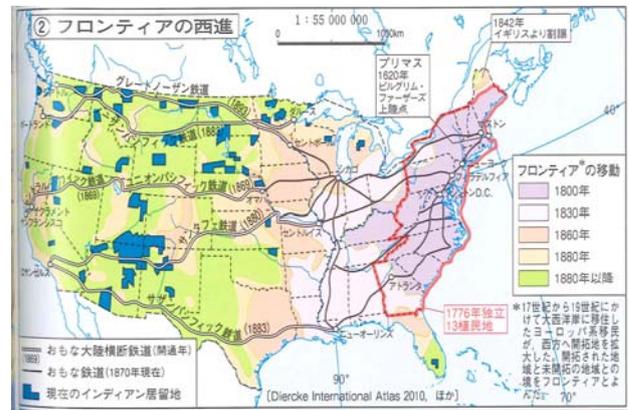
エレクトロニクス及びICT産業の成長を伴う経済開発を可能にしたのは、安価な労働力と砂漠に広がる広大な工業用地、西部の大消費地への近接性、豊富な電力供給であり、精密機械製造に適した乾燥した気候も優位な条件になりました。

デンヴァー、フェニックス両者の共通の要因を考えると、社会的要因は先端産業で、自然的要因は気候と水で書くのが妥当だと思ひます。

(3) 2次元の地図を見ながら「人口分布の空間的パターン」の特徴を見抜くのはなかなか難しいですね。アメリカ合衆国の西部の開拓が大陸横断鉄道建設やタウンシップ制の導入などにより行われていったことを知らないと言きにくかったのではないかと思ひます。

ページの右半分に掲載した帝国書院の地図帳からのアメリカの図を見てもらうと、設問Aに掲載されている図1-1の中で、中西部に人口が集中しているのはセントポール・セントルイス・オマハなどであることが分かります。これらの町は大陸横断鉄道とミシシッピ川などの河川との結節点で発展してきました。これらの地域ではプレーリー土という肥沃な土壌を背景に春小麦や冬小麦栽培が盛んで、収穫された農産物が河川で運ばれていましたが、鉄道が開通すると、小麦を小麦粉に精製する製粉業が発達してきました。工業の発展が人口増加をもたらしたとも言えるでしょう。さらに、「その特徴が生み出された背景」について考えると、西部への農業開発が進んでいった背景にホームステッド法とタウンシップ制の存在があります。ホームステッド法は1862年に当時のリンカン大統領の政権下で制定された法律で、未開拓の土地を5年間耕作した場合、耕作者に土地が無償で払い下げを定めた法律です。タウンシップ制は、西部開拓を促進

するため、18世紀後半～19世紀前半に実施された制度で、1区画を160エーカーとして基盤目状に土地を分割し、各区画に1軒ずつ農家を入植させました。西部への開拓時に、鉄道と農業制度が融合して、集落が形成されていったとみなせます。



設問B

(1) メガロポリスの地位の低下を述べるためには、**メガロポリス自体が魅力を失って人口が流出した状況、また、メガロポリス以外の地域で人口が増加したことを述べなければなりません。**

1950年から2000年までの期間なので、五大湖を中心とする重工業地帯が衰退してフロストベルトと呼ばれるようになり、近隣のメガロポリスでも雇用条件などが悪化して、人口が流出したと考えられます。また、五大湖周辺が衰退していく一方、北緯37度線以南の地域がサンベルトと呼ばれるようになり、先端産業などを中心に新たに産業が活発化していきました。なので、**衰退する北部から活気づく南部への人口移動が顕著になりました。サンベルト発展の要因には、安価で広大な土地、ヒスパニックなどの安価な労働力、原油などのエネルギー資源が豊富だったことが挙げられます。**

近年のことで言えば、**北部地域に住んでいる高齢者(退職者)が温暖な気候が分布しているフロリダ半島やカリフォルニア州に移住することがよく行われるようになっています。いわゆる引退移動です。**

(2) (B)～(D)の状況を1行でまとめる問題です。50年間経て、都市地域人口が増加し、郊外地区人口

強者の戦略

も増加しましたが、中心都市人口が微増かつ割合が低下するという状況になっています。中心都市人口の現象は、ドーナツ化現象の表れと考えられます。地価の高騰や居住環境の悪化に伴い、都心部の常住人口が郊外へ移住していったはずですが、今回は1行しか書けるスペースがないので、中心都市に集中していた状態から郊外へ分散していく状況を述べればいいでしょう。

(3) 珍しく用語説明問題が出されましたね。京大ではたまに見られる形式ですが、東大ではかなり珍しいと思います。山川出版社の『地理用語集』でどのように説明されているかを確認します。「都市再開発において、都心部に近い場所に住宅を建設し、移り住むこと。とくに高額所得者が、職住近接と文化活動や買い物に便利な都心部に住居を構える傾向がみられる。地価の関係で、多くは高層住宅になる。」とあります。この説明で96字なので、東大が3行で説明を求めてきていることは妥当な設問設定でしょう。ただ、都市再開発される地域の特徴が書かれていないので、老朽化住宅やスラムといった言葉を足してあげることが必要になります。

いつも生徒の答案を添削していてと思いますが、結果に関する記述だけ書いて、原因の記述が中途半端な人が多いと思います。例えば、「自家用車保有台数がかつてもともと東京や大阪などで多かったが、近年は地方で多くなってきた。その理由を述べよ」という問題があったとしますよね。ありがちな解答は「地方は公共交通機関が未整備であるため、自家用車がなければ不便だから」という感じになります。まず「不便」という**あいまいな表現を脱する努力をしてください**。自家用車がないので、「買い物や通院への負担が大きくなる」、もしくは「生活行動圏が狭まってしまう」というように具体的に書いてください。次に、東京などの大都市の内容をもっと詳しく述べてください。公共交通機関が整備されれば、自動車に乗る必要性が下がってくる、これは当たり前ですね。さらに、**地価が上がると駐車場代が高くな**

る、また**マンションなどが多く建つことで駐車場が居住地域から離れた場所に設置される**、などの問題点も起きてきます。つまり結果の「地方」のことだけ述べるのではなく、「なぜ東京などで自家用車を持ってなくなってきたのか？」という原因を深く考えるくせをつけるようにしてください。論述の力はそれで格段に上がっていきますよ。

設問C

(1) 何か設問Aと設問Bを踏襲しない、唐突に出題された感が否めない問題ですね。みなさんはどこから判断したか分かりませんが、(オ)のイスラム教徒の割合が簡単かと思います。中央アジア、トルコ、アルバニアなどが含まれている(e)に該当します。(エ)の正教徒の割合と(カ)のスラブ語の割合は丁寧に考えましょう。基本的には同じような国が該当しそうですが、**ルーマニアがポイント**になります。ルーマニアはスラブ民族諸国の中に浮かぶラテン系の国であり(いわゆる民族島)、スラブ語を母語にはしていません。ですが、宗教は正教徒ですので、ルーマニアが入っている(a)が(エ)、入っていない(d)がカに該当します。(ウ)の失業率はヨーロッパの南部で高くなる傾向があります。ギリシャの信用不安から**ヨーロッパ債務危機**も起こっています。南部地域が中心に色が濃くなっている(b)に該当します。(イ)の国民一人当たりGDPは、GDPが高く、かつ人口規模が小さい国で高くなる傾向があり、**スイスなどはその典型国**です。(f)もスイスの色が濃くなっていますが、同様に濃くなっているエストニアやラトビアの経済レベルが高いとは判断しにくいので、(c)に該当します。残る(ウ)の移民率が(f)に該当することになります。

(2) ×が付けられていない国々はスペイン、アイルランド、スイス、オーストリア、クロアチア、スウェーデン、フィンランドです。これらの国は北アメリカ諸国、トルコもしくはヨーロッパ内の国々の労働者が移民として入ってきて割合を上げていると考えられます。一方のエストニア、ラトビア、カザフ

強者の戦略

スタンは異なる要因があると指摘されています。ちなみにエストニアはエストニア人 69%・ロシア系 26%、ラトビアはラトビア人 59%・ロシア系 28%、カザフスタンはカザフ人 57%、ロシア系 27%となっています(『新詳高等地図』)。ここでは**ロシア人が多く存在している理由を述べる**こととなります。旧ソ連の時代にカザフスタンの小麦地帯にロシア人が入植したり、バルト三国やコーカサスなど各地のソ連内共和国にも入植し、経済面のみならず文化的にもロシアに統合させようとしたことがありました。細かい世界史っぽい内容ですが、知らなければ書きにくかった問題だと思います。

今年度の原稿はこれで終了です。また、来年にお会いしましょう。それまでにしっかり頑張って実力を上げておいてくださいね！